

## 「悪魔の評議会」——イクバルのウルドゥー詩(2)——

松村 耕光\* 訳

### はじめに

本稿は、悪魔の評議会における悪魔と評議員たちとの対話を通して、西欧の社会体制を批判し、イスラームこそ理想の社会体制であると主張するイクバル (Muhammad Iqbal, 1877-1938) 晩年の傑作ウルドゥー詩「悪魔の評議会 (*Iblīs kī Majlis-e Shūrā*)」の全訳である。

本作品は、1936年に書かれ——執筆の経緯は不明であるが、ムッソリーニが引き起こした第二次エチオピア戦争(1935年10月～1936年5月)の影響があると思われる——、1938年、イクバルの死後出版された詩集『ヒジャーズの贈り物 (*Armughān-e Hijāz*)』に収められた(イクバルが没したのは4月21日で、『ヒジャーズの贈り物』が出版されたのは11月である)。この詩集は二部構成になっており、第1部にペルシア語の詩——四行詩のみで、この部分が詩集全体の約4分の3を占めている——、第2部にウルドゥー語の詩が収められている。

---

\* 大阪大学世界言語研究センター准教授

## 「悪魔の評議会」

悪魔

諸元素のこの昔ながらの戯れ、このみすばらしい世界  
最高天に住む者たちの願いはかなわなかった<sup>1)</sup>  
今や世界の創造者は破壊を望んでいる  
「カーフとヌーンの世界」と名付けたこの世界の破壊を<sup>2)</sup>  
私は西欧の人間に専制支配の夢を見せてやった  
私はモスク、寺院、教会の呪縛を解いてやった<sup>3)</sup>  
私は貧しい者たちに宿命を教えた  
私は富裕な者たちに資本主義の熱狂を教えた  
私の魂の熱気によって動かされている人間の火を  
消すことができるだろうか  
我々が与えた水によって枝を高く伸ばした木を  
この古くからある木を押し曲げることができるだろうか

評議員その一

確かに魔王様の体制は安泰です  
人間どもの奴隷根性はさらに深く根づきました  
始めからこの哀れな者たちには平伏が運命づけられているのです  
直立姿勢のない礼拝こそ彼らの性に合うのです  
何の願いも持たず  
たとえ持ったとしても、それは消えてしまうか、未熟なままなのです  
私たちの絶え間ない努力によって  
神秘主義者や宗教指導者はみな専制政治の奴隷となったのです  
東洋の精神にはこの阿片がよく効いたのです  
神学も宗教音楽<sup>カッワーリー</sup>に劣らずよく効くのですが<sup>4)</sup>  
メッカに巡礼し、カアバ神殿を巡回する者はいます<sup>5)</sup>  
抜き放たれたムスリムの剣はもはやなまくらとなったのです<sup>5)</sup>  
誰の絶望を表しているのでしょうか  
「聖戦<sup>ジハード</sup>は現代のムスリムにとって不法行為である」という最近の決定は

- 
- 1) 「最高天に住む者たち」とは天使のこと。天使たちは、神が地上に人間を代理人として置こうとしたとき、そうしないように神に願った。コーラン 2 章 30 節を参照。
- 2) 「カーフとヌーンの世界」とはこの世界のこと。世界は神の「あれ (kun)」という言葉によって創造されたが、「あれ (kun)」という語は、アラビア語では、子音 k を表す文字カーフ (kāf) と子音 n を表す文字ヌーン (nūn) を組み合わせて綴る。コーラン 2 章 117 節、6 章 73 節、36 章 82 節を参照。
- 3) 政教分離を指す。
- 4) 「宗教音楽<sup>カッワーリー</sup> (qawwālī)」は南アジアのイスラーム神秘主義音楽。
- 5) ムスリムは、メッカ巡礼の際、カアバ神殿を巡回する。

評議員その二

民衆による統治を求める声は是か非か  
君は世界に生じた由々しき問題に気づいていない

評議員その一

気づいているとも——世界を見て私はこう考えるのだ  
専制政治を隠す布があれば何の心配もないと  
我々は専制政治に民衆の服を着せた  
人間どもがいくらか自己を知り、自分を見るようになったとき  
専制政治の実態は見ただけでは解らない  
独裁者や専制君主がいるとは限らない  
国民議会であろうと、皇帝であろうと  
他人の畑によこしまな目を向ければ専制君主なのだ  
君は西欧の民主主義体制を見たことがないのか  
顔は輝いているが、心はジンギスカンの心よりどす黒い

評議員その三

専制政治の精神が存続するならば何の心配もない  
しかしあのユダヤ人の不埒な振舞いにはどう対処したものか<sup>6)</sup>  
あの神の御光なきモーセ、あの十字架なきメシアは  
預言者ではないが、啓典を抱え持っている<sup>7)</sup>  
あの無神論者の鋭い眼差しについてどう言えばよいものか  
東西の諸民族に審判の日をもたらすのだ<sup>8)</sup>  
これ以上の乱心があろうか  
奴隷たちが主人の天幕の綱を断ち切ったのだ<sup>9)</sup>

評議員その四

その対応策ならローマ帝国の宮殿の中にある  
我々はカエサルの末裔にカエサルの夢を見せてやったのだ<sup>10)</sup>  
地中海の波に揉まれているのは誰か

---

6) 「あのユダヤ人」とはマルクスのこと。

7) 「啓典」とは『資本論』のこと。

8) 「あの無神論者」とはマルクスのこと。

9) ロシア革命を指す。

10) 「カエサルの末裔」とはイタリアのファシストたちのこと。「カエサルの夢」とは世界征服の夢のこと。

時には松のように高くなり、時には琴のように嘆くのは誰か<sup>11)</sup>

評議員その三

私は彼が思慮深いとは思わない

彼は西欧政治の内幕を暴露してしまった<sup>12)</sup>

評議員その五——悪魔に向かって——

あなた様の息の炎で世界の秩序は安定しました

望まれたときにあなた様は秘密を明らかにしてくれました

水と土はあなた様の熱によって躍動する世界となり

天国の愚か者たちはあなた様に教えられて賢者となりました<sup>13)</sup>

あなた様の方が人間の本性をよくご存知なのです

無知な奴隷たちの間で守護者として知られているあの者よりも<sup>14)</sup>

賛美、巡回のみを行っていた者たちは

あなた様の自尊心を見て最後の日まで首を垂れ、恥じ入るのです<sup>15)</sup>

西欧の魔術師は皆あなた様の弟子ですが

賢明であるとは思えません

あの問題を引き起こすユダヤ人、あの再来したマズダクの魂——

その狂気によって服は引き裂かれようとしているのです<sup>16)</sup>

荒野の鳥が鷹や隼と肩を並べようとしているのです

何という速さで時代の精神は変わるのでしょうか

大空の隅々にまで広がったのです

一握りの土埃に過ぎないと愚かにも思い込んでいたものが

11) ムッソリーニが地中海の覇権を巡って尊大な態度をとったり、慨嘆したりしたことを指している。バルシア語、ウルドゥー語圏では、松は直立した高木である。

12) 「彼」とはムッソリーニのこと。1935年のエチオピア侵攻など、ムッソリーニがあからさまな侵略行為を行ったことを指している。ウルドゥー第2詩集『天使ガブリエルの翼 (Bāl-e Jibrīl)』(1935年)に収められた詩「ムッソリーニ」では、イタリア人に民族的覚醒をもたらした指導者としてムッソリーニをイクバルは高く評価したが、ウルドゥー第3詩集『モーセの一撃 (Zarb-e Kalim)』(1936年)に収められた詩「アビシニア」や「ムッソリーニ」では、ムッソリーニの帝国主義的行動を批判している。イクバルは、ロンドンで開かれた第2回円卓会議(1931年)か第3回円卓会議(1932年)の帰途、ローマでムッソリーニと会見しており、後にムッソリーニの印象を次のように記している。「ムッソリーニについて私が書いたことに矛盾があるとのこと、まったくおっしゃる通りです。しかし、悪魔と聖者両方の側面がある人物をどう扱えばよいのでしょうか。もしムッソリーニと会見されれば、その目に表現しがたいほどの鋭さがあることがお解りになるでしょう。それは太陽光線のような鋭さだと言えます。少なくとも私にはそう感じられました。」(1937年3月12日付書簡。Shaikh 'Atā'ullāh, ed., *Iqbal Nāmāh*, vol.2, Lahore, 1951, p.315.)

13) 「天国の愚か者たち」とは人間のこと。

14) 「あの者」とは神のこと。

15) アダムを跪拝するよう神に命じられた時、天使たちは命令に従ったが、イブリースは命令に従わなかった。このためにイブリースは神の許から追放され、人間を最後の審判の日まで誘惑する存在(悪魔)となった。コーラン2章34節、7章11節以下、15章28節以下を参照。イクバルの悪魔観については、Schimmel, Annemarie, *Gabriel's Wing: A Study into the Religious Ideas of Sir Muhammad Iqbal*, Leiden, 1963, pp.208-219を参照。「賛美、巡回のみを行っていた者たち」は、天使を指している。天上の天使は、神の周りを回りながら神を賛美しているとされる。

16) 「ユダヤ人」とはマルクスのこと。マズダク(Mazdak)は、6世紀頃、ササン朝ペルシアで財産の共有を唱えたとされる人物。服を引き裂くのは狂気の表れ。

明日の騒乱を恐れて

山や草原や川は今日震えているのです  
ご主人様、世界が崩壊しようとしているのです  
ご主人様のご指導を仰いでいるこの世界が

悪魔——評議員たちに向って——

色彩と芳香のこの世界は我が手中にある

大地であれ、太陽、月であれ、層をなす大空であれ  
東洋西洋は驚くべき光景を見るだろう

私が西欧諸民族の血を沸騰させれば  
政治の指導者であれ、教会の長老であれ  
私の一声で狂人になってしまうのだ  
愚か者はガラス工場だと思っているが

この文明の杯と酒瓶を壊せるものなら壊してみるがよい  
天が引き裂いた衣服は

マズダクの論理の針ではかがれない  
街をうろつく共産主義者など私は恐れない

生活に困窮し、狂った頭で意味不明の叫び声をあげる者など  
脅威となる者たちがいるとするなら、それは

灰になってはいるが、未だに願望の火花を持つあの者たちだ  
その中にはいまだに

早朝の涙で身を清める輩<sup>やから</sup>が数人残っているのだ  
歴史の秘密を知る者は知っている

明日騒ぎを起こすのはマズダク主義ではなく、イスラームだと

二

この者たちがコーランの教えに従っていないことは知っている

彼らが信仰しているのは資本主義なのだ  
東洋の夜は暗いのに

聖地の長老たちが白い手を持たないことは知っている<sup>17)</sup>  
しかし、恐れているのだ、時代の要請によって

預言者ムハンマドの正道が姿を現すのではないかと  
預言者ムハンマドの法に気をつけよ

それは女性の貞操を守り、男性に試練を与え、男性を男性にしよう  
それはあらゆる奴隷制度への死の知らせ  
それは王も乞食も認めない

17) 「白い手」については、コーラン7章108節、20章22節、26章33節、28章32節を参照。白い手を持たないとは、ムスリムを指導する能力がないということ。

それはあらゆる汚れを富から取り除き  
富の所有者を富の管理者とする  
これ以上の思想と行動の革命があろうか  
「大地は王の所有物ではなく、神の所有物である」とは  
このような法は人々の目に触れないのが一番  
ムスリムが信仰を持たないでいるのは有難い  
ムスリムは神学に捕われていればよい  
神の書物の注釈に捕われていればよい<sup>18)</sup>

三

神を念じる者の暗黒の夜が明けないようにせよ  
その「神は偉大なり」<sup>アッラーフ・イクバル</sup>の雄叫びは世界を呪縛から解き放つかもしれないのだ  
マリアの子は死んだのか、不死なのか  
神の属性は神の本質とは別なのか、本質そのものなのか  
来たるべき者とはナザレのメシア本人のことなのか  
マリアの子と同じ資質を持った革新者のことなのか<sup>19)</sup>  
神の言葉は創造されたのか、創造されなかったのか  
祝福された人々の救済はどの信仰によってもたらされるのか……<sup>20)</sup>  
現代のムスリムには十分ではないか  
神学が彫り上げたこれらの偶像があれば  
ムスリムを行動の世界から遠ざけておくのだ  
人生の盤上ですべての駒が打ち負かされるようにするのだ  
最後の日までムスリムが奴隷でいてくれれば  
このはかない世界を他の者たちに譲ったままでいてくれれば有難い  
ムスリムにふさわしいのは  
躍動する命の姿を隠してしまうような詩や神秘主義  
あの者たちの覚醒をいつも私は恐れている  
あの者たちの宗教の本質は世界を管理することだから  
あの者たちを早朝の<sup>ズイクル</sup>連禱と瞑想に酔わせておくのだ  
あの者たちの隠遁主義をさらに強化するのだ<sup>21)</sup>

18) 「神の書物」とはコーランのこと。

19) 「革新者 (mujaddid)」とは、ヒジュラ歴の各世紀の初めにイスラームを革新するために出現するとされている人物。

20) 「神の言葉」はコーランを指す。「祝福された人々」とはムスリムのこと。

21) 「<sup>ズイクル</sup>連禱 (dhikr)」とは、神の名などを絶え間なく唱えること。